

中国東南沿海部・回族における〈食べ物〉としての ブタと宗教・民族アイデンティティ

砂 井 紫 里

はじめに

本稿では、イスラーム⁽¹⁾系民族集団である回族の一地域集団が、日常生活におけるブタ食とブタ・タブーについて理由付けを行なっていること、その語りには、イスラームと自集団についての彼らの態度が表われていることを示す。

筆者は、ブタを通して日常的な食事文化の社会的側面を記述することを課題としている。

本稿では、

(1) ブタ・タブーが一般的回族像と結び付いていること

(2) 調査地における食事行動とブタの位置づけ

を概観した上で、

(3) ブタ食とブタ・タブーについての人びとの語り

について一次資料（場合によっては二次資料）を整理して提示する。これをもとに

(4) 「ブタを食べる回族」が、宗教アイデンティティと民族アイデンティティを区別すること

で、ブタ食とブタ・タブーに対する違和感を解消していること

を明らかにする。

1. 一般的回族像とブタ・タブー

ブタ食タブーは、イスラーム系集団の集団的特徴として捉えられてきた。回族は、中国のイスラーム系「民族」⁽²⁾の一つであり、外来のムスリムと土地の人が混血して歴史的に形成された集団である。個別集団によってその背景社会は多様だが、回族としての「われわれ意識」を共有している。

回族のブタ・タブーは、ブタ食はもちろん、ブタそのものやブタを表すもの、ブタからの汚染を忌避するもので、食事に限定されないタブーとなっている⁽³⁾。ブタ・タブーは一義的にはイスラームのクルアーンに端を発するが⁽⁴⁾、中国における回族のブタ・タブーのあり方は、宗教上の教義のみに限られない。回族は必ずしもムスリムではなく、ムスリムではないがブタだけは食べられないという人も多い。

回族の食べ物カテゴリーは地域によってバリエーションがある。文献のほとんどにはイスラーム

ム中心の断片的な記述しかなく、回族の食べ物カテゴリーの民俗分類は系統的に明かにはされていない。それでも少なくともブタについては、他の食べ物とは分けて、タブーであることが必ず書かれている。

というのも、中華世界という、回族を包むより大きな文化的脈絡においては、農業、経済、食事、儀礼など様々な場面でブタが重要な位置を占めているのだ⁽⁵⁾。そこで回族のブタ・タブーは、集団の特徴として、他の集団との関係が良好な場合には誠意をもって、関係の悪い時には格好の嫌がらせの道具として用いられてきた⁽⁶⁾。

回族自身もまた、宗教小冊子や民族紹介などの場で、「回族はブタを食べない」という言説をくりかえしており、自ら描く文化的自己にブタ・タブーが深く関わっている [砂井 1998]。イスラーム慣習はなくとも、ブタ・タブーだけは守る回族など、回族とそれ以外の集団との境界 [Pillsbury 1973] としても捉えられてきた⁽⁷⁾。

こうした、「ブタを食べない」という一般的回族像が様々なレベルで共有されていることから「ブタを食べる回族」に対する驚き、違和感、狼狽、興味が生じている⁽⁸⁾。当の本人たちも例外ではない。そこでは、人びとは何らかの方法で理由付けや解釈を行ない、違和感などを解消していると考えられる。

本稿では、ブタ食とブタ・タブーについての人びとの語りを検討することで、食べ物のカテゴリーについての思考操作を明らかにする。1997年から2000年の春、夏の延べ3ヶ月ほどの滞在のなかで、折りに触れて、なぜブタを食べるか、なぜブタを食べないのかについて質問をしてきた。質問と応答は、立ち話や食事の合間などくだけた雰囲気の中で行なった。この質問は、ブタ食あるいはブタ・タブーの起源ではなく、彼ら自身の食について説明してくれることを期待するものである。質問者の誘導なしに、ブタ食あるいはブタ・タブーを話題となることもあるが、それは、初対面の出会い頭の会話がほとんどだった。

2. 陳埭丁氏のブタ・タブーとブタ食

概 況

中国東南部、福建省沿岸部に位置する陳埭鎮は東南沿海経済開放区の新興工業地区である。26の行政村のうち7つの行政村（13の自然村に分かれる）では登録住民の92%以上が回族であり、いずれも姓が「丁 ding」の単姓村である。丁氏は1979年になって初めて回族として正式に認定された⁽⁹⁾。彼らの生活習慣は強い宗族組織、儒教、仏教やブタ食など、漢族と殆ど変わらない。少数民族の一員としての社会的地位を得るまでの丁氏回族の紆余曲折は、回族のエスニシティのあり方、民族識別政策の有効性、人びとの側からの内なる民族アイデンティティとの齟齬、国家による外部からの民族帰属の固定化、といった問題を扱うのに事例として取り上げられた [横山 1989; 鈴木 1993; Gladney 1996ほか]。

実際、彼らは「回族である」という帰属意識を共有している。また後に述べるように「回族らしさ」としてのブタ・タブーの観念を程度の差はあれ共有している。

陳埭では一部の人びとの間で脈々とイスラームの記憶が受け継がれてきた⁽¹⁰⁾。ムスリム人口はごく僅かではあるが、公式な活動や建築物などで「イスラーム的なもの」を表現してきている。

例えば近年、石碑や歴史上の墓の修復、移動や、モスクの尖塔を模した人民政府の建物、清真寺（モスク）を建設した。また、青年が国内外のイスラーム学校に留学してイスラームを学べるように学習班をつくるなど、イスラーム教育にも力を入れている。その一方で、陳埭の圧倒的多数の庶民にとって、イスラームは「祖教（祖先の宗教）」であって、現在の自分たちのものではない。

食とブタに関して言えば、彼らの住む陳埭では、ブタ食は当たり前のことである。清真寺の前をブタがうろついたり、市場では食べ物の素材に加工されたブタが並べられるなど、ブタそのものも身近な存在である。

儀礼におけるブタ

年中行事にはイスラム暦によるものと、農歴によるもの、国によって定められたものがある。陳埭丁氏がブタを敢えて食べない機会は2種類ある。一つはイスラーム関連の行事とムスリムの食事であり、一つは大宗祠で行われる祖先祭祀である。

回族はイスラームの、开斋节（ラマダン明けの祭）、古尔邦节（犠牲祭）、圣纪节（ムハンマドの聖誕祭）を三大祭とする。陳埭では1988年、回族事務委員会の提唱で行われたが、その後、毎年全てを行なったわけではない。現在では儀礼に直接参加するのは、ムスリム青年だけだという。儀礼の期間中の食事は青年が教長樓の台所で作る。

祖先祭祀ではブタを供物とすることが禁じられている。

私たちは回族祖先の血をひいているからである。彼らは族譜の中で私たちに彼らにブタを供えてはいけないと指示しているのです [Gladney 1996: 270]。

という丁氏の解答をグラドニーは引用している。祖先祭祀でブタがタブーとされること、茶で口をゆすいでブタの汚れを取ることから、グラドニーは祖先祭祀を祖先がムスリムだったこと、自らの民族出自を想起する機会とした⁽¹¹⁾。

しかしながら、ブタを供物とすることを禁じるのは、祖先祭祀でも限られた機会である [叶、庄、呉 1990; 庄 1990]。ブタが禁止されるのは春と冬に大宗祠で行われる祖先祭祀で、ブタではなくウシ、ヒツジなど族譜の規定のとおりのお供物をそろえる。参加者は70歳以上の男性と有権者、貢献者に限られる。家庭や、小宗祠における祖先祭祀ではブタはむしろ不可欠な素材である。ま

た、葬送儀礼、婚姻儀礼などの通過儀礼においてもブタは不可欠な素材である。多くの機会で儀礼的価値をもつブタが、限られた機会——最も公的な場、大宗祠における祖先祭祀において禁止されることは、ブタを禁止する機会が自らの父系出自に関するアイデンティティを想起する機会となるだろう。

日常食事におけるブタ

当該地域における構造化された食事行動 [Douglas and Nicod 1974 : 744] は、〈主食〉と〈副食〉から構成される。より簡単な食事では〈主食〉と〈副食〉が一碗のなかでおさまる。よりきちんとした食事は空間展開し、さらに〈副食〉を入れ替えたり、まずオカズを飲物と食べて後から〈主食〉を出すなどの時系列展開も加わる。〈主食〉は米饭（ゴハン）、稀飯（カユ）、面条（メン）がある。〈副食〉の素材は野菜類と魚貝類中心に構成される。しかし、市場の店舗を数えると、海鮮類、鳥類、獣肉類のうち、ブタを扱う店が圧倒的に多いので、日常食事において、ブタを何らかの形で食べていると予想される。

小吃は〈主食〉〈副食〉の構成はとらず、時、場の脈絡は決まっていない食事行動である。小吃は肉類が素材となることが多く、ブタ料理を出す店、ウシ料理を出す店と専門化している。ブタはゴハンと、ウシはメンと組み合わせられる傾向があった。幾人から、この地域の特色ある料理として、ウシの小吃を紹介された。これは料理本やレストランのメニューで地域独特の料理と紹介される料理とは異なる。

女性も男性も食事をつくる。家では母親⁽¹²⁾が作る人が多いが必ずしもそうではない。男女に関わらず、より年齢が低い人あるいは料理が上手い人が準備、片づけをする。普段の食事では家族全員が揃って食べるのではなく、各自、主食の入った碗と箸を持って適当に食べることが多い。ブタは普通の食べ物としている。〈主食〉と〈副食〉のある食事、〈一碗完結〉の食事、酒のつまみ、小吃など、様々な機会でもブタを食べている。家庭でも外でも、ブタを食べることも食べないことも、その選択は自由にできる。

イスラームの機会、日常におけるブタ・タブーは、ブタ食に比べ、はるかに限定的な場でのことである。清真寺における食事のうち、青年の食事ではブタ、ブタの加工類は一切用いられない。青年以外については、ブタを素材に使った小吃を食べることもあり、必ずしも清真寺におけるブタ・タブーは維持されていない。少なくとも清真寺の台所でブタを調理することはない。

主麻（毎週金曜日の集団礼拝）、協会の会議に伴う食事ではブタをつかわない。こしらえるのはだいたいガムスリム青年の仕事である。

日常の場でのブタ・タブーは、場所よりも食事の参加者が重要で、参加者の宗教アイデンティティによる。食事の参加者も出来事の脈絡によって変化する。公式訪問団などがあるときは、青年だけでなく、中年、老年層も加わり、その食事においてブタは用いられない。この場合、ブタ・

タブーは回族としての行為に関わり、民族アイデンティティを表現している。

3. ブタ食とブタ・タブーについての理由付け

前節で述べたように、実際にブタを食べるか食べないかは、食事の機会と参加者によって異なる。そこで、ブタ食とブタ・タブーについての人びとの考え方を、当人の宗教的帰属と民族的帰属に触れずに一般化することはできない。ここでは、晋江市イスラム教協会と回族事務委員会という二つの公式団体への参加の有無を目印として人びとによる理由付けを記述し、次の節で解説、考察を行なう。晋江市イスラム教協会は、ムスリムの全国組織である中国伊斯兰教（イスラム教）協会の地方下位団体で、晋江市には1994年に結成された。回族事務委員会は丁氏の回族認定に活躍した民間団体が1979年に正式に人民政府の下位組織となった。

a) 協会にも事務委員会にも関係がない人

陳埭の大多数の人が、協会にも回族事務委員会にも直接関わらない。彼らは、〈主食〉と〈副食〉のある食事、〈一碗完結〉の食事、酒のつまみなど、様々な機会にブタを食べている。彼らにとってブタを食べることは、ごく普通のことであるが、ブタ食について「漢化」ということばを使って説明することもある。イスラム教協会員でも、回族事務委員会の委員でもないある男性は、ブタを食べることについて、「われわれは漢化しているのだ、食べ物もそう」であり、「なんでも食べる」（男性、50代）と説明した。この「漢化」という説明を、しばしば人びとは口にした。また、回族文献や、他地域の回族によるブタ・タブーに関する発言にも使われている。「漢化」の使われ方については、次項で検討する。

ある青年は「ふつう回族はブタを食べないけれど、陳埭の人は食べる。」（女性、20代）と言う。ブタ料理は好きかどうか尋ねたところ、「ブタ肉も悪くない」との返答だった。彼女は、ムスリムではなく、イスラームに関心はないが、回族はブタを食べないものだという考えを持っていた。

ある青年は、自分がムスリムか否か、は難しい問題だとした。ブタを食べる彼は、「自分は回族だから」イスラームに関心を持っているが、信仰と実践には違和感を持っているという（男性、20代）。彼は、主麻の日に清真寺に行くことがあるが礼拝はしない。彼はブタを食べるが、回族の宗教はイスラームだという考えを持っていた。

b) 協会には入っていないが、事務委員会で活動をする人

彼らにとってもまたブタ食はあたりまえのことである。事務委員会の発行する冊子や活動でのイスラームの扱いから、彼らのブタ食についての考え方が予想される。イスラームは「祖教」であり、自分たちはムスリムではないのでブタを食べるという姿勢である。彼らはブタ食を彼らの生活の一部としながら、彼らがブタを食べることを説明する伝承をもって答えている [Gladney 1996ほか]。伝承は、中国イスラームの中心人物や海外の文化人類学者によるインタビュー、研究機関のフォーマルなアンケートに答えたものだという点で、一種、公の回答ともいえる。一次資

料ではなく、また伝承は検討の範囲外ではあるが、民族の政治に関わるムスリムではない丁氏回族の人びとの公の見識という点で重要だと考えるため以下に引用する。

【伝承1】初めて皇帝が政府主催の宴会を開いたとき、丁启浚は決して箸を付けようとしなかったという。皇帝は変に思って、なぜ食べないのか尋ねた。丁启浚は「私たちは豚肉を食べることを祖先に禁じられているのです」と答えた。皇帝はこれを聞いてすぐに「ならば簡単だ。お前たちが豚肉を食べることを私が許そう。」と言い渡した。それからというもの、丁氏の一族は豚肉を食べるようになった [郑 1990 : 254]。

【伝承2】第11代の明賜進士通議大夫刑部左侍郎贈尚書・丁启浚（字享文、号哲初、継号蓼初、1569－1636年）が、官吏をしていたとき、手を組んで儲けられないかという魏忠賢の誘いを断った。魏は [丁が] 豚肉を食べないのは君子を欺こうとの罪であると [皇帝に] 進言した。皇帝は丁启浚を疑い、宴を開いて文官、武官を呼び集めた。果たして丁启浚が座って豚肉を食べないのを見てこれを戒めた。丁は「私の祖先はブタを食べませんでした。今私がブタを食べれば、祖先に背くことになるし、食べなければ君子を欺くことになる。こまったものです」といった。皇帝はその誠実さに感心して、丁氏はブタを食べることを皇帝から賜った。こうして習俗となった [庄 1990 : 14・[] 内は筆者の補]。

【伝承3】私たちの先祖はとても誠実なムスリムでした。私たちの11代の先祖・丁启浚の時代のことです。彼は明朝時代に政府秘書として仕えていました。彼は皇帝の玉座をねらっているとでっちあげられて告訴されました。このため、皇帝は丁家を皆殺しにしようとしたのです。丁家の主な目印は彼らがムスリムだということです。彼らの命を救うため、丁家は「100代までイスラーム（宗教）を実践」することはできなかった。そうしてこの時に私たちは漢族に同化し始めたのです [Gladney 1996 : 271]。

詳細にはバリエーションがあるが、内容は、明の官僚である丁启浚（1569－1636年）の時に、皇帝から彼らがブタを食べる許可を得たという物語である。ブタ食を説明する伝承と時、人物を同じくする伝承がある。イスラーム実践をやめた理由を説明するもので、こちらは皇帝から授かるのではなく、皇帝による弾圧に対して身を守るためにイスラームを放棄したという語りになっている。

c) 協会関係者、および協会員でもあり事務委員会の成員でもある人

イスラーム教協会員のうち、日常的な宗教実践を行なっているのは、青年層だけである。ブタを食べる人と食べない人とがあるが、ムスリム青年はけして食べない。成員の多くはイスラーム実

践は行っていないが、特別な機会には参加する。イスラーム関連の儀礼では、ブタそのものが料理の素材から避けられるので食べることはない。協会員は協会の出資、運営や、青年たちの学習機会を支援している。ある協会員は、ブタ食について「食べる人はムスリムではないから」、別の協会員は「陳埭丁氏回族だから」と説明する。

ムスリム青年は、イスラーム＝祖教と説明するが、同時に、現在自分たちの宗教でもある。ムスリムになってからブタを食べなくなった。普段、食事は家にとるが、ラマダンの間や省外からの来客があるとき、清真寺に隣接する教長楼（アホンやマンラーの宿泊施設）で食事を作って食べる。

小さい頃、ブタを食べていたことについて、「父、母、兄、祖父たち家族も食べていたから」、「小さい頃は何も分かっていなかったから」と回想する。「またブタを食べたいとは思わない。」

家族や他の人のブタ食について「ムスリムでないから」と説明する。家では、母が作った時はブタを使っていない料理を選んで食べるか、自分で作るという。ある青年はこの現状について次のように述べている。

同じ鍋を使うし、「分清」（はっきりと区別する）できない。「分清」はイスラームでは重要である。独立してないからしょうがない。今は仕事してないし、お金もらっているから。でも独立したら素菜にする（男性、20代）。

またある青年は、母、キョーダイとの食事は好きではないという。「平気で自分の前でブタを使った料理を食べるから。」彼は外食を好む。

清真寺の周囲でブタが飼われていることについて「要分清」（区別するべきである）であるという。「ブタはイスラームで禁じられているし、汚くて、臭いから。」かつて、農業を営む丁氏回族はブタの飼育もしていたが現在ブタを飼っているのは「外地人（よそもの）」である。

ある青年は「イスラームで禁じられているから」酒もタバコも飲まない。ある青年は「酔わなければいいので」酒、タバコを飲むが、酔いすぎないために酒を飲んだ後は吐くことにしている。タバコ、酒を飲むかどうかは人によって異なるが、ムスリム青年はみなブタを食べない。

4. 考 察

ブタ食についての説明は、宗教に関わる人、民族政策に関わる人、いずれにも直接には関わらない人たちの間で違いはあまりなかった。また、ブタ・タブーについての知識の差もほとんどなかった。ムスリムによるブタ・タブーについての説明では、食べると吐くといった身体的反応や、ブタ肉が料理に入っていれば臭いでわかるというような感覚的嫌悪を思わせる発言はなかった。また「回族はブタを食べないから長生きだ」とか「ブタを食べないのは衛生についての意識が高

いからである」といった回族文献で必ず用いられるような説明 [砂井1998] をしていない。

ブタを食べることについての、彼ら自身による説明では、必ず次のことに言及していた。

1. 漢化しているから
2. イスラームは祖教であって、わたしたちはムスリムではないから
3. わたしたちはブタを食べる回族である

ブタを食べないことについての説明では、

4. 祖先がムスリムだったから祖先祭祀にはブタを使わない
5. 自分はムスリムで、イスラームではブタ食を禁じているから

の二つが共通していた。また、なぜブタを食べるのか、食べないのか、という質問に対して、自己でなく自集団についての語りとなる点が共通している。

a) と b) の人びとにとってブタを食べることは、生まれながらの当然のことであり、現在でもそうである。c) の人びともまた、ブタ食の文化に生まれ育つが、ムスリムになることでブタは禁じられ、ブタ、ブタ製品を食べなくなる。しかしブタを食べないと明言するのは日常的な宗教実践をしている青年に限られる。

「漢化」は、中国民族学や中国についての文化人類学的研究などで用いられた学術用語を人びとが自分たちのことばとして使用している。マイノリティがマジョリティである漢族に同化吸収されることを前提としていること、そもそも漢族とは何かという問題などから、現在は文化人類学的文脈ではほとんど使われなくなっている [王 1994]。

「なんでも食べる」という発言では、食事も周囲の漢族と同じことが、回族にあって自集団の個性として語られている。その語り口は、軽やかで誇らしげである。

「わたしたちはブタを食べる回族である」という発言には、会話の脈絡と雰囲気によって反射的に答えているように思われるものと、彼ら自身によるブタ食についての評価と思われるものがある。前者は、「漢化」した回族として注目されることに慣れた彼らならではの言動である。後者には、自集団の個性として誇らしげな語りと、一種恥のような感覚があるような消極的な語りがある。現代中国における回族の下位集団にあって自集団の「ブタを食べる回族」という個性を強調することは、他の回族集団と差別化に役に立つ。これはブタ・タブーの社会的側面の一つである。ブタ食を肯定的に誇りとして語る積極評価に対して、ブタを食べる回族という発言には、本来すべきブタ・タブーを守っていない、回族でありながらブタを食べていることについての否定的評価もあるのかもしれない。少なくとも、「ブタを食べない」という一般的回族像が内面化されている。

彼らは回族とイスラームの結び付きを認識し、回族はブタを食べないというイデオロギーを共有している。「こうあるべきだ」と考えているからこそ、理由付けて現状を肯定する。ここで陳埭におけるイスラームの意義について触れる必要があるだろう。イスラームは祖先の宗教であると

いう認識が根本にある。そして a) のイスラームにジレンマを持つ青年のこともばにもあるように、イスラームは回族の宗教であるという意識もある。

このように陳埭の日常にとって、イスラームはあくまで信仰と宗教実践であって、生活習慣とは別のものである。祖先の墓の修復と移動、イスラーム風の見かけの人民政府の建物、教育などの目に入る「イスラーム的なもの」と、彼らの食卓に上るブタ料理とは意識レベルの違うものだ。「イスラーム的なもの」は、エスニックな他者である漢族や、政府に対する差異として、回族や他のイスラーム諸国などに対する連帯として意味をもつ。

一方、ブタ食ではなく「我々はブタを食べる回族である」という発言には回族の他集団との差異化（下位集団としての個性）において意味がある。「1979年以降、“民族”のアイデンティティのエスニックな表現と宗教的表現をはっきりと区別する中国の社会主義政策のもと、陳埭丁氏などの回族は、イスラーム信仰や実践に言及することなしに、彼らの民族アイデンティティを表現する選択を与えられた」[Gladney 1996: 290] 現在にあって、丁氏回族は改めて「イスラーム的なもの」を選択している。a) から c) の人びとのブタ・タブーを説明する言説にあるように、ブタ・タブー自体を宗教面に還元することで、ブタ食の理由としている。「イスラームは回族が受け継いできたものの重要で否定できない局面であるが、ある脈絡においては回族アイデンティティの現代的表現にとって必ずしも決定的ではない」[Gladney 1996: 290] が、陳埭にあって「イスラーム的なもの」——イスラームの宗教面では必ずしもない——として未来への表現には役に立つ要素なのだ。

おわりに

本稿では、イスラーム系の民族集団である回族の一地域集団が、日常生活におけるブタ食とブタ・タブーをどのように実践、説明しているか、についての人びとの理由付けを記述、検討してきた。

彼らの語りは、イスラーム、自集団についての態度を示していた。彼らは宗教アイデンティティと民族アイデンティティを区別することで、「ブタを食べる回族」に対する違和感を解消していると考えられる。

従来の回族研究では、ムスリムである回族を扱うものがほとんどで、地域的にもイスラーム色の濃い地域が対象となっていたため、イスラームの規範に依存した記述が多かった。本稿では、人びとの語りに注目することで、当該の人びとにとってのブタ食とブタ・タブーの評価と人びとが抱く回族とイスラームについての一つの考え方を明らかにすることができた。これはイスラームに依拠した規範論的な記述とは異なる様相である。

文献

石毛直道

1975「食事パターンの考現学」『生活学』1: 165-180.

1984『鉄の胃袋中国漫遊』平凡社.

王崧興

1994「中国人：その中心と周辺」黒田悦子（編）『民族の会うかたち』朝日新聞社.

黄庭輝

1996「回族」嚴如嫻編著『中国少数民族の婚姻と家族 中巻』江守五夫監訳 pp93-104 第一書房.

砂井紫里

1998「〈食べ物〉の選択と〈ことば〉：中国・回族におけるブタ・タブーについての文献研究」『遡航』16: 49-68.

鈴木正崇

1993「創られた民族：中国の少数民族と国家形成」飯島茂（編）『せめぎあう「民族」と国家：人類学的視点から』京都：アカデミア出版.

ダグラス、M

1995 (1969)『汚穢と禁忌』塚本利明（訳）思潮社.

武田雅哉

1995『猪八戒の大冒険』三省堂.

1997「激動の近代中国：ブタたちの場合」『動物と人間の文化誌』pp46-6 吉川弘文館.

西江雅之

1986「『食べ物』と言語調査」『言語』15 (2): 86-91.

横山廣子

1989「多民族国家への道程」『岩波講座現代中国 3 静かな社会変動』pp263-284 岩波書店.

リーチ、E. R.

1976 (1964)「言語の人類学的側面：動物のカテゴリーと侮蔑語について」諏訪部仁訳『現代思想』4 (3): 68-90.

渡辺隆宏

1999「モンゴルにおける魚類の利用」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』44 (4): 87-99.

Anderson, E. N and L. Marja

1977 Modern China: South. In *Food in Chinese Culture*. K. C. Chang (ed.), pp317-382. New Heaven and London: Yale University Press.

Douglas, Mary

1993 (1975) Deciphering a Meal. In *Implicit Meanings*. pp249-275. New York and London: Routledge.

Douglas, Mary and Jonathan Gross

1981 Food and Culture: Measuring the Intricacy of Rule Systems. *Social Science Information*. 20 (1): 1-35.

Douglas, Mary and Micheal Nicod

1974 Taking the Biscuit: the structure of British meals. *New Society*. 19: 744-747.

Fan, Ke

1999 The Reciprocity of Traditionalism and Modernity: Case Study of Identity Politics in South Fujian. Paper Presented at International Conference on Tradition and Change: Identity, Gender, and Culture in South China. New Asia College, The Chinese University of Hong Kong.

Gladney, Dru C.

1996 (1991) *Muslim Chinese: Ethnic Nationalism in the People's Republic*. Cambridge: Harvard University

Press.

Pillsbury, Barbara

1973 *Cohesion and Cleavage in a Chinese Muslim Minority*. Ph. D. Dissertation to Columbia University.

1975 Pig and Policy: Maintenance of Boundaries Between Han and Muslim Chinese. In *Minorities: A Text with Readings in Intergroup Relations*. B.Eugene Driessman (ed.), pp136-145. Dryden Press.

《陈埭回族史研究》編輯委員会

1990《陈埭回族史研究》北京：中国社会科学出版社。

陈埭镇回族事务委员会編

n.d.《晋江市博物馆／陈埭回族史馆》晋江：陈埭镇回族事务委员会印。

马彦虎

1993《伊斯兰教在陈埭》《伊斯兰》1993年第2期：37-40。

穆萨

1995《为什么穆斯林不抽烟》《晋江穆斯林》10：3-4。

叶文程、庄景辉、吴孙权

1990《陈埭镇岸兜村社会民俗调查》《陈埭丁氏回族史研究》编委会编《陈埭丁氏回族史研究》pp231-246、北京：中国社会科学出版社。

郑振满

1990《明代陈江丁氏回族的宗族组织与汉化过程》《陈埭丁氏回族史研究》编委会编《陈埭丁氏回族史研究》pp247-257、北京：中国社会科学出版社。

庄景辉

1990《陈埭丁氏宗祠的建立及基祖先崇拜》《陈埭丁氏回族史研究》编委会《陈埭丁氏回族史研究》pp143-173、中国社会科学出版社。

1996a《时代因应与对策：陈埭回族汉化的考察》ワークショップ『東アジアの変動過程の人類学的研究』レジュメ pp8-15、於・東京大学。

庄景辉編校

1996b《陈埭丁氏回族宗谱》香港：绿叶教育出版社。

註

- (1) 本稿ではイスラーム、クルアーンなど、アラビア語の読みに近い表記を使う。しかし中国のイスラム教協会については、伊斯兰教協会という公式名を使っているのにそれに従いイスラム教協会と表記する。
- (2) 新中国成立以後の客観的調査を経て、中国国家が認定した漢族とそれ以外の55の少数民族が「民族nationality」である。初期には、スターリンの民族定義に習って、特定の項目（宗教、言語、領域、心理）に基づいて民族の識別を行なったが、1978年の改革開放政策以来、当該民族の帰属意識を重視するなど政策転換を行なっている。これによって本稿で事例とする陈埭丁氏は回族の一員として認定された。現在も、漢族あるいは他の少数民族の下位集団ではなく、別個の民族であるという主張が認められない集団があり、彼らは「——人」とされ未分類であったり、いずれかの民族の下位集団として扱われている。
- (3) こうしたタブーについて、リーチとダグラスらのカテゴリー境界と、汚染の概念がタブーと関わっているという議論に立脚している [リーチ 1976；ダグラス 1995]。ただし、タブーの起源についてのこれらの議論は、文化にタブーが内在することを前提としており、外来タブー [渡辺 1999：92] である回族のブタ・タブーを説明するには不十分である。
- (4) ブタは、血液、正式な手続きを経ないで死んだ動物と並ぶイスラームの三大不浄の一つである。クルアーンでは、こうした禁止に並んで、「(神は) 食欲のためでもなく、掟にそむこうとしてでもなく、無理強いされた

- 者には、寛容にして慈悲深いお方である」[メッカ啓示、第16章（蜜蜂の章）第115節；第2章（雄牛の章）第173節；第5章（食卓の章）第3節；第6章（家畜の章）第145節]と、ある状況においては許容する章句がある。しかし回族文献におけるクルアーンの引用部分では、こうした許容のことはみられない[砂井 1998：52]。
- (5) 例えば[武田 1995；1997] 参照。中国におけるブタの価値観については稿をあらためて論じたい。
- (6) 悔教事件など。
- (7) 回族はタバコ、酒を飲まないともいわれるが、これはブタと異なり、クルアーンやハディースの解釈によって異なる。なぜムスリムはタバコ吸わないかというタイトルで、ブタ・タブーを説明するのと同じ論理で説明する文章もある[穆萨 1995]。しかしながら、タバコ、酒はブタ・タブーほど身体化されたタブーではなく、実際に飲む人もブタ食に比べはるかに多い。ブタほど集団の特徴や、社会関係について用いられない。
- (8) こうした反応の中には、本当は回族ではないのに、政府の少数民族に対する優遇政策を受けるために証拠をつくりあげて回族と名乗っている集団もある、といった否定的な意見をも聞くことがあった。この正否はともかくとして、こうした意見それ自体が中国における「民族」のあり方を考える上で考察の対象となりうる。
- (9) 中央から派遣された調査員に対して、丁氏回族自身が回族とされることを拒んでいる。丁氏回族の民族識別に対する対応は、国家の民族政策の揺れを反映している。文化大革命期など少数民族であることが不利な時期には、漢族と変わらないことを主張した[Fan 1999]。1978年の政策転換の後、積極的に民族識別に取り組み回族の一員として承認を受けている。識者の中には、少数民族に対する優遇政策を受けるためだけの行為とする者もあるが、歴史資料が丁氏回族の主張の正当性を示している。回族とされるのを避けた時期にも、学校の授業で回民の歴史について授業をして批判される[写 1993：39] など、少なくとも一部の人は漢族とは異なる「われわれ意識」をもっていたことは明らかである。
- (10) 明の《祖教説》では、陳埭出身の役人が、故郷でブタ・タブーや葬送儀礼などイスラーム習慣がすたれたことを嘆いている[庄 1996b]。これは陳埭丁氏の祖先がムスリムだったことを示す証拠として、回族文献によく引用される[陳埭鎮回族事務委員会編 n.d.; Gladney 1996]。また明代には「漢化」していたことを示すものとしても引用される[《陳埭回族史研究》編輯委員会 1990]。少なくともこの時点で一般の人びとはイスラームを実践していないことがわかる。しかしながら一部の、おそらくはエリート層がイスラームの記憶を維持してきた。例えば、民国期のアホン招聘、成達師範学校（イスラーム高等教育機関）卒業生、開放後の民族承認と活動、開放後の老人会による青年に対する宗教教育など。
- (11) グラドニーは年4回その機会があるとするが[Gladney 1996]、他の資料によれば祖先祭祀の中でも「春冬二祭」のうち大宗祠の儀礼に限られる[叶、庄、吳 1990ほか]。
- (12) 子どもは皆、丁姓になるが、その母親は姓を維持している。彼女たちの多くは漢族出身である。一般に、漢族女性が回族男性と結婚する場合には、イスラームへの改宗とブタによる汚染浄化の手続き[黄 1996]、あるいは改宗しなくても回族の食習慣を尊重することになる。前述のように陳埭では圧倒的多数がブタを食べ物とし、ムスリムではないのでこうした手続きは取られないが、自分の子どもがムスリムである場合は気をつかう。